

児玉九十著作目録の再検討（1）

廣 嶋 龍太郎*

はじめに

児玉九十(1888 - 1989)は大正期から昭和期の教育者であり、戦前においては成蹊学園の主事を経て明星実務学校(のちの明星中学校)の校長を務め、戦後においては明星大学を創設し初代学長を務めた人物である。前号までは、戦前における児玉の著作を中心に、解題を執筆してきた。その際に、児玉の著作集を参照する機会が何度かあったが、系統だってまとめられた著作目録は存在しなかった。そのため、本稿では児玉の著作目録を作成し、今後の研究の助けとしたい。

本稿では、先行研究にあたる『この道五十年』(1965年)と『真実の教育を求めて』(1977年)のうち、『この道五十年』を中心として1965(昭和40)年までの期間についてまとめ、次稿で『真実の教育を求めて』を中心とした期間をまとめたい。なお、2014(平成26)年は明星大学創立50周年(1964年開学)にあたり、『この道五十年』の出版時期は大学創立とほぼ一致する。

1. 先行研究

児玉の著作を網羅的にまとめた全集や著作目録は存在しないが、NDL-OPAC(National Diet Library Online Public Access Catalog)によって一般に刊行された著作をおおまかに知ることは可能である¹。また、論文記事については、児玉九十著『この道五十年』が児玉の論集としての性格を持っている。

『この道五十年』は1965(昭和40)年に児玉の喜寿を記念して出版された。その「まえがき」には「講演の速記、放送、また求められるが儘に寸暇に筆を執ったものなど、現行の保存されているものだけでも四千編近く」の中から取捨選択し、論集、教養、随筆と分けて収録したものである、と述べられている²。それぞれの収録作の末尾には、掲載誌名などの書誌事項が部分的に示されている。『体験教育』や『帝国教育』などに活字で掲載された記事のほか、式典などの講演・講話原稿を収録している点が特徴である。

ここでは、著作目録の対象を図書と図書以外の論文等の著作(以下、論文等と記す)に分け、図書についてはNDL-OPACで確認されたものを示す。論文等については『この道五十年』に収録されたものを示した上で、NDL-OPACと国立国会図書館デジタル化資料で確認できるものを加え、さらに筆者が2013年12月時点で直接確認できた文献を示す³。なお、『この道五十年』はタイトルの誤記や表記を変更した箇所が散見され、原典を忠実に収録したものではないと判断される⁴。そのため、書誌事項が不十分なものについては原典を確認した上で、注記に書誌事項を省略せずに示した。

『この道五十年』の表記と統一するために、本文中の旧字体については適宜新漢字等に改めたが、NDL-OPACにおいて旧字体で表記されているものはそのまま掲載した。また、目録の順序については出版年順とし、共著の著作は末尾の備考で共著者名を示した。なお、『この道五十年』の年号表記は和暦が中心であるが、一覧を作成する都合から、巻号に用いられた表現以外は西暦に改めた。

* 教育学部 准教授 日本教育史

2. 児玉九十の著作（図書）

以下の9点は、1965（昭和40）年までの期間において、NDL-OPACで確認できた児玉の著作（図書）である（2013年12月現在）。「児玉九十」で検索し、10件の図書が確認されたが、出版年が同一で明らかに重複した1件は削除した。

凡例：『書名』 出版者、発表年（共著者、シリーズ名、版、その他備考など）

1. 『父の思出』 星野正一、1933年（児玉九十編、星野鏡三郎、鹿島精一、曾和龜之輔、鈴木巖、徳久次郎、児玉九十、岩河信義、星野辰雄、村上藤太、新美健之助、後藤仁、後藤ふみ子、竹内邦雄、早水信夫、長島文道、今村正夫、安齋直泰、櫻田早苗、矢野清一、星野正子著、27-33頁）
2. 『真実の教育』 新更会刊行部、1935年（『新更論集』を分冊したものと考えられる）
3. 『青年心理の特徴と其教育』 新更会刊行部、1936年（『新更論集』を分冊したものと考えられる）
4. 『両親教育』 主婦之友社、1936年
5. 『教育者としての母：続両親教育』 主婦之友社、1939年
6. 『両親教育』 主婦之友社、1940年（補16版）
7. 『両親教育』 主婦之友社、1948年（訂）
8. 『両親教育』 主婦之友社、1952年（改訂版、再版）
9. 『この道五十年：喜寿記念』 1965年

3. 『この道五十年』収録作（論文等）

以下の109点は、『この道五十年』に収録された著作（論文、新聞記事、講演記録等）を、発表年順に整理したものである。目次の著作数は106点であるが、本文中で上・中・下などに分かれるものはそれぞれ1点と計算した。凡例の並びは『この道五十年』の表記に従った。なお、同じ雑誌の掲載であっても著作によっては巻号が示されていないものがあり、表記が統一されていない。ここでは、巻号が確認できるもののみ表記を統一した。

凡例：「書名」（『この道五十年』に示された書誌事項） 発表年

1. 「第一回欧米視察談」（静岡県金谷町小学校に於ける諸団体連合歓迎会席上の講演、同校職員の記事）1926年
2. 「新入学生徒の家庭に対する希望」（入学式後の父兄会講話）1927年
3. 「体験教育の提唱とその実際」（学苑創立記念）1927年
4. 「欧米教育と日本教育の長短」（東洋大学講演速記）1927年
5. 「国民精神総動員と成人教育」（新更会発会式講演）1928年
6. 「学制改革の重心たる大学改造論」（『体験教育』昭和四年五月号）1929年
7. 「家庭の教育化」（『体験教育』昭和四年六月号）1929年
8. 「国家心と国際心の相関」（第二回新更会夏期大学講演）1930年
9. 「教育勅語奉戴四十周年記念に際して」（『体験教育』昭和五年十月号）1930年
10. 「貴族院公正会の決議を読む」（『体験教育』昭和六年五月号）1931年
11. 「史学上より見たる我が国の現状」（新更会夏期大学講演）1931年⁵

12. 「御下賜金拝戴に際して」(『体験教育』昭和七年十一月号) 1932 年
13. 「満州に於ける列国関係の史的考察」(新更会夏期大学講話) 1932 年
14. 「中学校教育の問題シンポジウム」(岩波書店発行教育誌) 1932 年⁶
15. 「太平洋の問題に就いて」(新更会夏期大学講話) 1933 年
16. 「日本精神作興と宗教々育の問題」(『体験教育』昭和八年七月号) 1933 年
17. 「功利主義・利己主義教育の破産」(『帝国教育』昭和八年九月号) 1933 年⁷
18. 「師範学校改革問題」(『体験教育』昭和八年九月号) 1933 年
19. 「帝国教育界の不祥事に就いて」(『体験教育』昭和八年十二月号) 1933 年
20. 「教育の本質上よりみたる官学と私学」(軍人会館に於ける恩給財団十周年記念会祝辞演説) 1934 年
21. 「師範教育制度改正要項批判」(『体験教育』昭和九年二月号) 1934 年
22. 「何を以て答え奉るべきか」(『体験教育』昭和九年四月号) 1934 年
23. 「教育行政の改善」(『体験教育』昭和九年六月号) 1934 年
24. 「教育時評」(『帝国教育』昭和九年六月号) 1934 年⁸
25. 「真実の教育」(新更会夏期大学講話) 1934 年
26. 「上級学校入学問題についての児童の両親に語る」(『生命の教育』昭和十年一月) 1935 年
27. 「時局偶感」(『帝国教育』昭和十年一月号) 1935 年⁹
28. 「私学の監督機関創設に対して」(『体験教育』昭和十年七月号) 1935 年
29. 「青年心理の特徴とその教育」(新更会夏期大学講話) 1935 年
30. 「汎太平洋教育会議」(『体験教育』昭和十年八月号) 1935 年
31. 「エチオピア問題」(『体験教育』昭和十年九月号) 1935 年
32. 「保導協会に就いて」(『体験教育』昭和十年十二月号) 1935 年
33. 「青年期を迎える男子の家庭教育」(NHK 家庭講座) 1936 年
34. 「家庭の宗教化」(『大法輪』昭和十一年五月号) 1936 年¹⁰
35. 「学制改革実現せば」(『教育評論』昭和十一年六月号) 1936 年
36. 「内閣審議会公表の文教刷新の目標を評す」(『帝国教育』昭和十一年六月号) 1936 年¹¹
37. 「ヒューマンタッチの教育としての寄宿教育に就いて」(文部省主催日本諸学振興委員会発表) 1936 年
38. 「小学教育内容改善の重点」(『帝国教育』昭和十二年二月号) 1937 年¹²
39. 「我が教育上の信念」(教育研究誌、昭和十二年二月号) 1937 年
40. 「世界教育会議に就いて」(訓導生活社、昭和十二年七月号) 1937 年
41. 「非常時年頭の計」(NHK 母の時間放送) 1938 年
42. 「これからの教育の目標」(『いのち』昭和十三年一月号) 1938 年
43. 「学制改革重点」(『教育週報』昭和十三年一月号) 1938 年¹³
44. 「集団勤労に就て」(『体験教育』昭和十三年七月号) 1938 年
45. 「支那事変一周年に際して」(支那事変一周年記念式辞) 1938 年
46. 「教えと行い」(NHK 母の時間放送) 1938 年
47. 「傷痍軍人感謝日に於ける生徒への訓話」(『帝国教育』昭和十三年十月号) 1938 年¹⁴
48. 「旅は道づれ世は情」(NHK 朝の修養講座放送) 1938 年
49. 「思う念力岩をも通す」(NHK 朝の修養講座放送) 1938 年
50. 「人の心は九分十分」(NHK 朝の修養講座放送) 1938 年

51. 「長期建設に対応する教育」(『教育週報』昭和十三年十二月三日号) 1938年¹⁵
52. 「わが校の非常時教育」(『教育週報』昭和十三年十二月二十九日号) 1938年¹⁶
53. 「子供の自立的訓練」(NHK 母の時間放送) 1939年
54. 「日支事変中の支那視察」(『帝国教育』昭和十四年八月号) 1939年¹⁷
55. 「高等学校及び中学校問題」(『帝国教育』昭和十四年九月号) 1939年¹⁸
56. 「子供を強く育てましょう」(NHK 一家庭の時間放送) 1939年
57. 「道徳の力」(NHK 青年の時間放送) 1940年
58. 「我が国中学校における日満華三国親善に関する教育」(紀元二千六百年記念東亜教育大会の発言) 1940年
59. 「頼山陽と尊王精神(上)」(NHK 朝の修養の時間放送) 1940年
60. 「頼山陽と尊王精神(下)」(NHK 朝の修養の時間放送) 1940年
61. 「新体制の指導精神」(読売新聞朝刊) 1940年
62. 「生と死」(NHK 修養の時間放送) 1940年
63. 「世に処する道」(NHK 小学校高等科の時間放送) 1941年
64. 「中央協力会議に於ける中等学校問題」(『教育週報』昭和十六年八月号) 1941年¹⁹
65. 「新らしき生活の建設(上)」(NHK 戦時家庭の時間放送) 1942年
66. 「新らしき生活の建設(中)」(NHK 戦時家庭の時間放送) 1942年
67. 「新らしき生活の建設(下)」(NHK 戦時家庭の時間放送) 1942年
68. 「総力教育のしおり」(『婦人朝日』) 1942年²⁰
69. 「家庭教育と敬神崇祖」(NHK 放送) 1943年
70. 「指導理念の簡易化と生活の修練」(日比谷公会堂・関東地区興亜教育大会) 1943年
71. 「最近に於ける中等学校生徒の思想の変化」(NHK 教師の時間放送) 1945年
72. 「新教育に必要な討議法」(『文部時報』比叡山夏期大学講演) 1946年²¹
73. 「社会教育者としての警察官諸君に対する希望」(東京都管区警察学校講話) 1949年
74. 「文化国家の建設と私学振興の急務」(『私学団体総連合会会報』二号) 1947年²²
75. 「公安委員発足第一年の反省」(国家地方警察『ひかり』昭和二十四年七月号) 1949年
76. 「個人指導の問題・特に面接指導について」(『教育現実』昭和二十四年九月号) 1949年²³
77. 「子供の叱り方とほめ方」(ラジオ東京放送) 1952年
78. 「大学入試に失望」(日本放送局教育相談時間放送) 1954年
79. 「大学か家業か」(日本放送局教育相談時間放送) 1954年
80. 「学問より金を」(日本放送局教育相談の時間放送) 1954年
81. 「私が教育者となった動機」(『高校時代』昭和三十二年七月号) 1957年
82. 「第二回欧米視察より帰りて」(東京管区警察学校講話) 1957年
83. 「驚くべき西独逸の繁栄」(『東京通信』昭和三十三年一月十一日号) 1958年
84. 「邦人働き場所の拡大策と信頼される人物教育の急務」(『武蔵野新聞』昭和三十三年一月十五日号) 1958年
85. 「全審連総会より帰りて」(『体験教育』昭和三十三年四月号) 1958年
86. 「新しい親子間の問題」(『女性仏教』昭和三十三年九月号) 1958年²⁴
87. 「我が校長道」(『児童心理』昭和三十四年三月号) 1959年²⁵
88. 「日本民族の優秀性」(『全国学園新聞』昭和三十六年五月二十一日号) 1961年²⁶
89. 「新春に際して」(『体験教育』昭和三十六年一月号) 1961年

90. 「新入生諸君歓迎の言葉」(『体験教育』昭和三十六年四月号) 1961 年
91. 「山の遭難をなくそう」(『全国学園新聞』昭和三十六年七月二日号) 1961 年²⁷
92. 「オリンピックを美しく」(『全国学園新聞』昭和三十六年八月六日号) 1961 年²⁸
93. 「読書週を迎えて」(『全国学園新聞』昭和三十六年十月十九日号) 1961 年²⁹
94. 「戦後の私学の発展」(『私学時報』昭和三十六年十一月一日号) 1961 年³⁰
95. 「産学協同と私学」(『私学時報』昭和三十六年十一月二十一日号) 1961 年³¹
96. 「公德心が欠けている」(『全国学園新聞』昭和三十六年十一月二十五日号) 1961 年³²
97. 「冬休みを意義あるものに」(『全国学園新聞』昭和三十六年十二月二十四日号) 1961 年³³
98. 「学校事故防止と責任感」(『全国学園新聞』昭和三十七年二月四日号) 1962 年³⁴
99. 「自主性とファイト」(『全国学園新聞』昭和三十七年四月八日号) 1962 年³⁵
100. 「国鉄事故と気のゆるみ」(『全国学園新聞』昭和三十七年五月十五日号) 1962 年³⁶
101. 「受験生にみる三つの形」(『全国学園新聞』昭和三十八年二月十五日号) 1963 年³⁷
102. 「社会道徳を振興せよ」(『全国学園新聞』昭和三十八年七月十五日号) 1963 年³⁸
103. 「四十周年記念式々辞」(記念式) 1963 年
104. 「このごろの世相について」(日本短波放送局放送) 1963 年
105. 「私の学生時代」(学苑随筆集) 1964 年
106. 「年頭の快ニュース」(『全国学園新聞』昭和三十九年二月一日号) 1964 年³⁹
107. 「中学四年制説」(出典不明) 時期不明
108. 「下剋上の風潮を打破せよ」(大政翼賛会第三回中央協力会議に於ける提案説明) 時期不明
109. 「私学教育四十七年」(高尾山に於ける私学教育研究所研修会講演) 時期不明

4. 『この道五十年』未収録著作(論文等) ① NDL-OPAC、国立国会図書館デジタル化資料(2013年12月現在)

以下の57点は、『この道五十年』に収録された以外の著作(論文等)の中から、上記の検索で1965(昭和40)年までの期間について確認したものである。3の講演や口頭発表と4の出版物は別物として示している。

凡例:「書名」『掲載誌』掲載巻(号)、発表年(備考:掲載誌の編者など)

1. 「追悼文」『井上健遺稿集』1929年(海江田信兼編)
2. 「我が校に於ける宗教々育の実際」『教育と宗教』第1巻第6号、1929年
3. 「我が校に於ける宗教々育の実際」『教育と宗教』第1巻第7号、1929年
4. 「成人教育に就て」『曹洞宗布教講習録』1929年(曹洞宗務院編)
5. 「同人隨想」『教育と宗教』第2巻第7号、1930年
6. 「中學教育の使命」『教育と宗教』第3巻第12号、1931年
7. 「同人の聲」『教育と宗教』第3巻第2号、1931年
8. 「同人の聲」『教育と宗教』第3巻第4号、1931年
9. 「同人の聲」『教育と宗教』第3巻第6号、1931年
10. 「同人の聲」『教育と宗教』第3巻第9号、1931年

11. 「如是我觀」『教育と宗教』第4巻第7號、1932年
12. 「卒業生と就職の問題」『教育と宗教』第4巻第3號、1932年
13. 「私が今文部大臣ならば」『教育と宗教』第4巻第2號、1932年
14. 「滿洲國助成は天與の使命なり」『帝国教育』(10月1日號)(611)、1932年
15. 「二木順益君を憶ふ」『永遠之歩み』1933年
16. 「御下賜金拜戴に際して」『恩賜金拜戴記念誌』1933年
17. 「中學教育界への要望」『帝国教育』(1月1日號)(617)、1933年
18. 「明星中學校に於ける體驗教育」『日本の労作学校』第1輯、1933年(小原国芳編)
19. 「太平洋の問題に就きて」『新更論集』第2巻、第5回新更夏季大学講演集、1935年(新更会刊行部編)
20. 「滿洲に於ける列國關係の史的考察」『新更論集』第1巻、第4回新更夏季大学講演集、1935年(新更会刊行部編)
21. 「眞實の教育」『新更論集』第3巻、第6回新更夏季大学講演集、1935年(新更会刊行部編)
22. 「青少年の家庭教育に就て」『日本婦道講座』第4巻、1935年(義済会編)
23. 「特輯 嫁ぎゆく頃 花嫁をつくる座談會」『婦女界』52(5)、1935年
24. 「テーブル・スピーチ 六、兒玉九十氏」『創立十周年記念誌』1935年(私立中等学校恩給財団編)
25. 「會員寄稿 教育の本質上より觀たる官學と私學」『創立十周年記念誌』1935年(私立中等学校恩給財団編)
26. 「至誠の教育」『真理』3(4)、1937年
27. 「家庭の宗教化」『処世実話全集』第9巻我が信仰と生活、1937年⁴⁰
28. 「學生よ、何處へ行く(時局と學生)」『いのち』6(3)、1938年
29. 「現下の時局に處する道」『成田山開基一千年祭記念国民精神総動員講演集』1938年(成田山開基一千年祭事務局編)
30. 「中學校教育の改革」『帝国教育』(4月號)(726)、1939年
31. 「師範教育の革新について」『現下国民教学の革新的諸問題』1941年(教育問題研究会編)
32. 「進學と轉校についての母の心得」『母の愛育全集』第5巻少年少女の巻、1941年(主婦之友社編輯局編)
33. 「ヒューマンタッチ教育としての寄宿教育について」『日本諸学振興委員会研究報告』第1篇教育学、1942年(文部省思想局編)
34. 「生活と鍊成」『帝国教育』(9月號)(779)、1943年
35. 「(座談會)新制高校を志す諸君へ」『中学時代』1(5)、1949年
36. 「個人指導の問題 -- 特に直接指導について」『教育現実』1(2)、1949年
37. 「座談會 現代の學生」『学苑』11(4)、1950年
38. 「終戦後に於ける教育の動向と私学教育の状況」『私学年鑑』昭和26年版、1950年(日本私学団体総連合会編)
39. 「日本私立中等高等学校連合会の現況」『私学年鑑』昭和26年版、1950年(日本私学団体総連合会編)
40. 「生活と宗教教育」『仏教文化』6(4)、1950年
41. 「年頭の辞」『浜のまもり』第2巻第1号、1950年(横浜市警察本部警務部教養課編)
42. 「大學を出て倉庫番になつたK」『オール生活』6(6)、1951年(実業之日本・ACC編)
43. 「名士アンケート(趣味と推せん書)」『受験と學生』36(2)、1951年
44. 「教育委員会について」『国民』(614)、1952年(社会教育協會編)
45. 「祝辞」『学苑』(臨時増刊)(157)、1953年(昭和女子大学近代文化研究所編)
46. 「座談會 青年とスポーツ」『高校時代』1(2)、1954年
47. 「座談會「最近の事故の教えるもの」」『修学旅行』(10)、1954年
48. 「隨筆——忘れ得ぬ話二題」『政界往来 = Political journal』20(10)、1954年

49. 「読者座談会 高校生は訴える」『高校時代』1 (4)、1955 年
50. 「私の提案」『修学旅行』(14)、1955 年
51. 「精神教育としての宗教」『宗教』1956 年 (日本放送協会編)
52. 「誌上座談会 合格にモノいうもの」『中学時代』8 (7)、1956 年
53. 「戦後十年間の私学回想」『日本私学団体総連合会史』1956 年 (日本私学団体総連合会史編纂委員会編)
54. 「東京オリンピックへの要望」『政界往来 = Political journal』25 (10)、1959 年
55. 「生活と宗教」『仏教文化』1、1960 年
56. 「修学旅行をよくするために」『修学旅行』(53)、1961 年
57. 「日本人の優秀性」『小林政助伝：在米同胞人の先覚 救世軍在米日本人部の活動』1963 年 (山室武甫編)

5. 『この道五十年』未収録著作 (論文等) ②その他、直接確認したもの

以下の 34 点は、上記の 2 から 4 に該当しない 1965 (昭和 40) 年までの期間に発行された児玉の著作について、2013 年 12 月までに筆者が原典を確認したものである。

凡例：「書名」『掲載誌』掲載巻 (号)、発表年 (備考：共著者など)

1. 「私学審査会の提唱」『教育週報』(442)、1933 年
2. 「問題を投げる (その十六) 青年学生の徳育改善方法如何」『教育週報』(459)、1934 年 (児玉九十提題、小澤恒一、小川陸郎、岡本作次郎、岡田恒輔共著)
3. 「問題を投げる (その廿一) 教育者の事大主義」『教育週報』(463)、1934 年 (原田実提題、尾高豊作、千葉春雄、龍山義亮、児玉九十共著)
4. 「東京府知事の主催で府教育の改善を語る大座談会—各方面の代表者を網羅して」『教育週報』(467)、1934 年 (香坂知事、篠山課長、長谷川乙彦、為藤五郎、松下専吉、川村理助、下川兵次郎、児玉九十、古谷剛次郎、山田清、市川源三、清水由松共著)
5. 「問題を投げる (その廿九) 教育社会より陰鬱を駆除するには」『教育週報』(471)、1934 年 (小澤恒一提題、児玉九十、常田宗七、木内キャウ、小野源三共著)
6. 「文政刷新の唯一手段 教育参謀本部の要 現前の教育諸問題を語り論ずる 本社主催座談会」『教育週報』(481)、1934 年 (稲毛詛風、小原國芳、馬上孝太郎、相澤熙、児玉九十、高良富子、池岡直孝、下中彌三郎、為藤五郎共著)
7. 「学制改革の前提に 教育国策研究所 現前の教育諸問題を語り論ずる 本社主催座談会」『教育週報』(482)、1934 年 (稲毛詛風、小原國芳、馬上孝太郎、相澤熙、児玉九十、高良富子、池岡直孝、下中彌三郎、為藤五郎共著)
8. 「世界教育会議を迎える準備 教育会は、教育者は」『教育週報』(482)、1934 年 (上沼久之丞、山榊儀重、入澤宗壽、岸邊福雄共著)
9. 「中学四年制説」『教育週報』(497)、1934 年
10. 「小刀細工の中学校制度文部案」『教育週報』(534)、1935 年
11. 「文部省改革論 (五) 先づ—教学局の設置」『教育週報』(547)、1935 年
12. 「宗教と教育の座談会」『大法輪』3 (3)、1936 年 (堀池英一、龍山義亮、長谷川乙彦、児玉九十、浅野孝之、小松千莎、小林珠子、高田儀光共著)
13. 「教育革新の第一義— 行の教育の提唱」『大法輪』3 (11)、1936 年

14. 「国民保健と教育 — 行の教育の提唱」『大法輪』3 (12)、1936年
15. 「定石になつた「素人文相」の是非 教育諸家何と見る—教育畠が当然」『教育週報』(560)、1936年
16. 「総選挙の所感」『教育週報』(563)、1936年
17. 「文相適材私底匡救策」『教育週報』(571)、1936年
18. 「互尊互敬精神の教育」『大法輪』4 (1)、1937年
19. 「不滅の法輪 オリムピック大会と精神教育の革新」『大法輪』4 (2)、1937年
20. 「変態時局と国民の覚悟」『大法輪』4 (3)、1937年
21. 「自発敢為の教育」『大法輪』4 (4)、1937年
22. 「長期建設に対応する教育 (二)」『教育週報』(707)、1938年
23. 「茗溪会の師範大学案を讀みて」『教育週報』(761)、1939年
24. 「心のたが」『教育週報』(776)、1940年
25. 「村長との雑談」『教育週報』(798)、1940年
26. 「翼賛会中央協会議に列席しての所感」『教育週報』(815)、1941年
27. 「科学教育振興上の改善事項」『教育週報』(841)、1941年
28. 「生産拡充と教養の問題」『教育週報』(853)、1941年
29. 「中村園長先生小伝」『成蹊学園創立四拾周年記念特集—斯の道の為に』成蹊会、1952年
30. 「「産学協同」のすすめ」『全国学園新聞』(267) 1961年
31. 「二学期を迎える心がまえ」『全国学園新聞』(291)、1961年
32. 「“高校時代”に学ぶこと」『全国学園新聞』(296)、1961年
33. 「受験生の夏休みのあり方」『全国学園新聞』(345)、1962年
34. 「道義心の強い技術者を」『全国学園新聞』(464)、1964年

おわりに

以上のように、本稿では『この道五十年』の不足を補う形で、1965 (昭和40)年までの児玉の著作目録を整理した。その結果、『この道五十年』収録作には含まれない91点の著作を挙げる事ができた。この時期は明星大学が開学した時期と重なることから、開学当時までの児玉の教育思想を知るために有効な著作目録となったと考えられる。その中で明らかになったことを三点述べ、著作目録の再検討の考察としたい。

一点目は、特定の掲載誌に複数の寄稿が見られることである。列挙すると、『大法輪』『体験教育』『新更論集』『帝国教育』『修学旅行』『中学時代』『高校時代』『教育と宗教』『仏教文化』『全国学園新聞』『私学時報』『教育週報』『いのち』である。『大法輪』と『体験教育』についてはすでに明星教育センター研究紀要で紹介されているが、他の掲載誌についても継続して紹介し、児玉の人物研究を進める必要がある。

二点目は、児玉の著作をテーマ別に体系化する必要があるということである。『この道五十年』は「随筆」「教養」「論集」の三つの項目でまとめられていたが、分類の指針が示されておらずテーマもばらつきがある。児玉の著作は教育に関する内容が多いが、例えば「教育」に関するものについては「学校教育」「宗教教育」「家庭教育」などの項目に分け、そのうち「学校教育」についてはさらに細かいテーマを設けて体系化しなおす作業も必要である。

三点目は、二点目とも関連するが、「明星教育」に関する論考の体系化である。明星大学では、「明星学苑の建学の精神に基づく教育理念、教育目標、教育実践」を「明星教育」と定義しており、明星教育センターは「明星教育に関する広報活動や明星教育に則った教育活動の検討」を活動内容としている⁴¹。しかし、明星学苑の創始者である児玉

九十の教育思想について研究した論文はほとんどなく、十分解明されているとは言えない。「体験教育」「ヒューマンタッチの教育」「労作教育」などの教育論や、明星学苑の各学校における教育実践など、「明星教育」に関連すると考えられる著作の収集と今後の体系化によって、その検討が可能であろう。今回発見した未収録資料の一例として、「道義心の強い技術者を」（『全国学園新聞』）は明星大学を紹介する特集の一部であり、児玉が公の媒体で創設当初の明星大学の教育理念・教育目標について言及した事例に加えてよいものであろう。この他にも先行研究に収録されていない著作が多数存在することから、これまで「明星教育」と定義してきた内容についても再検討を加えることが可能であると考えられる。

なお、『この道五十年』は、先行研究としての価値は認められるものの、表記が統一されていない点、原典の表題が正確に収録されていない点、網羅的な著作集ではない点などから著作集として十分なものではない。そのため、今後の研究成果も踏まえ、適切な体裁の著作集を刊行することが望ましいと考えられる。一方で、NDL-OPACでは新聞記事の著者表示はなく、現在絶版となっている昭和前半の記事を検索する手段は手作業に頼るところが大きいため、『この道五十年』の情報を基に周辺の記事を探すことができた。

今後の課題としては、新聞や雑誌の中で国立国会図書館に所蔵のないものが複数あったため、引き続き収集を続けたい。2013年12月時点で国立国会図書館に所蔵がないか、もしくは資料整理中で収集できなかったものとしては、『生命の教育』（1935年）、『教育評論』（1936年）、『ひかり』（1949年）、『高校時代』（1957年）、『武蔵野新聞』（1958年）、『私学時報』（1958年）、『東京通信』（1958年）が挙げられる。

最後に、国立国会図書館では蔵書のデジタル化を進めており、本稿の執筆中にもいくつかの情報が追加で確認された。本稿は2013年12月の時点での情報を基にしているが、今後も児玉の著作については検索可能な情報が増加していくと考えられる。児玉の著作の収集は継続していく予定であるが、思わぬ誤りや新たな情報についてはご指摘いただければ幸いである。

注

- 1 NDL-OPAC <https://ndlopac.ndl.go.jp/>（2013/12/17 確認）なお、NDL-OPACのWEBページには「国立国会図書館蔵書検索・申込システム」と和文表記されている。
- 2 児玉九十『この道五十年』1965年、まえがき。
- 3 国立国会図書館デジタル化資料 <http://dl.ndl.go.jp/>（2013/12/17 確認）
- 4 たとえば、『この道五十年』に収録された『帝国教育』の記事については、以下のような誤記・変更が見られる。単なる作業上の誤記か、児玉の原稿が出版の際に変更されたのか、あるいは『この道五十年』の執筆の際に意図的に変更されたのかは不明である。
 第650号「教育時評（文部省内の軋轢農民道場）」（原題）→「教育時評」
 第692号「内審の文教刷新の目標を評す」（原題）→「内閣審議会公表の文教刷新の目標を評す」
 第721号「銃後援強化週間第一日生徒への訓話」（原題）→「傷痍軍人感謝日に於ける生徒への訓話」
 第730号「支那視察より還りて」（原題）→「日支事変中の支那視察」
 第731号「高等學校及中學校問題」（原題）→「高等学校及び中學校問題」
- 5 講演自体は1931年とされているが、出版されたのは翌年である。「史學上より見たる我が國の現状」新更会編『現代日本の研究：第三回新更夏季大学講演集』、1932年。
- 6 「中學校教育の問題シムボジウム」『岩波講座教育科学』第15冊、1932年。
- 7 「功利主義・利己主義教育の破産」『帝国教育』（634）、1933年。

- 8 「教育時評（文部省内の軋轢農民道場）」『帝国教育』（650）、1934年。
- 9 「時局偶感」『帝国教育』（665）、1935年。
- 10 「家庭の宗教化」『大法輪』3（5）、1936年。
- 11 「内審の文教刷新の目標を評す」『帝国教育』（692）、1936年。
- 12 「小学教育内容改善の重点」『帝国教育』（700）、1937年。
- 13 「学制改革の重点」『教育週報』（659）、1938年。なお、原典にある「の」の文字は『この道五十年』に表記されていない。
- 14 「銃後援強化週間第一日生徒への訓話」『帝国教育』（721）、1938年。原典とはタイトルが大幅に異なる。また、原典は『この道五十年』に示された10月号ではなく、11月号である。
- 15 「長期建設に対応する教育（二）」『教育週報』（707）、1938年。
- 16 「わが校の非常時教育（其七） 明星中学校」『教育週報』（702）、1938年。なお、『この道五十年』に示された12月29日号は存在せず、10月29日号に掲載されている。
- 17 「支那視察より還りて」『帝国教育』（730）、1939年。原典とはタイトルが大幅に異なる。
- 18 「高等学校及中学校問題」『帝国教育』（731）、1939年。原典には「び」の文字は存在しない。
- 19 「中央協力会議に於ける中等学校入学問題」『教育週報』（846）、1941年。原典には「入学」の文字が入る。
- 20 「総力教育のしをり」『婦人朝日』19（4）、1942年。
- 21 「教育に必要な討議法」『文部時報』（828）、1946年。原典には『この道五十年』にある「新」の一文字は存在しない。
- 22 「文化国家の建設と私学振興の急務」日本私学団体総連合会編『会報』（2）、1947年。
- 23 「個人指導の問題—特に面接指導について」『教育現実』1（2）、1949年
- 24 「新しい親子間の問題（特集・新しい親と子の関係三）」『女性仏教』3（9）、1958年。
- 25 「我が校長道」『児童心理』13（4）（通号148）、1959年。なお、『この道五十年』に示された3月号ではなく、4月号である。
- 26 「日本民族の優秀性」『全国学園新聞』（273）、1964年。
- 27 「山の遭難をなくそう」『全国学園新聞』（280）、1961年。
- 28 「オリンピックを美しく」『全国学園新聞』（286）、1961年。
- 29 「“読書週間”を迎えて」『全国学園新聞』（301）、1961年。
- 30 「戦後の私学の発展—私学時報発刊十五周年記念に際して」『私学時報』（343）、1961年。
- 31 『この道五十年』に示された号は『私学時報』（345）1961年であるが、4面分の紙面に「産学協同と私学」と題する記事は存在しない。
- 32 「公德心が欠けている」『全国学園新聞』（306）、1961年。
- 33 「冬休みを意義あるものに」『全国学園新聞』（311）、1961年。
- 34 「学校事故防止と責任感」『全国学園新聞』（316）、1962年。
- 35 「自主性とファイト」『全国学園新聞』（327）、1962年。
- 36 「国鉄事故と気のゆるみ」『全国学園新聞』（334）、1962年。
- 37 「受験生にみる三つの形」『全国学園新聞』（378）、1964年。
- 38 「社会道徳を振興せよ—社会悪除去の根本方途」『全国学園新聞』（403）、1963年。
- 39 「年頭の快ニュース—日本人特有の人間美発揮」『全国学園新聞』（434）、1964年。
- 40 内容は『大法輪』（1936年）掲載稿の再録である。
- 41 明星大学明星教育センター <http://www.meisei-u.ac.jp/facilities/kyoiku.html>（2013/12/17 確認）